

あり、近年注目されたキビノヒトリシズカが $n=30$ であるのは後行倍数化、フタリシズカが 14 であるのは 15 からの減数とみられる。即ちセンリョウ科には 15 という先行倍数性の温存、30 という後行倍数性、14 という減数も見られるのである。

ハスノハギリ科の 20 と 40 の後行倍数性の存在に併せて 20 という先行倍数性の残存は、この科がクスノキ科と近く、しかも熱帯圏での残存科と考えられるだけに意味が深い。さらにドクウツギ科は *Coriaria* 1 属だが、私のいう古赤道分布を示す科の一つである。多心皮性は多心皮類とのつながりを暗示する。先年の第一回東亜関連植物調査で入手した資料アンデスドクウツギで和田正三君が調べたデータによると $n=20$ であって、これも 5 の先行倍数性を暗示する。日本のドクウツギも同数である。また山崎敬君から第三次印度ヒマラヤ植物調査隊が入手した、ブータンのヒマラヤドクウツギを譲り受けて播種した実生でも 20 であった（金子賢一郎氏算定、未発表）。これらを合わせて考えるとこの 20 は仲々興味がある。

それから無道管植物のウインタラ科では *Drimys* は sect. *Tasmannia* を中心として濠州及びニューギニアのものは 13 と 14 であるのに、中米の *Drimys* sect. *Drimys* ではニュージーランド産の *Pseudowintera* と共に $n=43$ が知られている (Raven 及 Kyhos 1965)。この数はまことに不思議な数だが、前者は $15 \rightarrow 14 \rightarrow 13$ で減数の結果であり、後者は 15 の後行倍数性で 45 となつてからの $\rightarrow 44 \rightarrow 43$ の減数ではないかと推定されることからみても古い 15 の数は可能性が高い。

こうしてみるとやはり基本は $5 \rightarrow 10 \rightarrow 15 \rightarrow 20$ であり、それぞれに、減数、後行倍数化、*agmatoploidy* が 1 回乃至くりかえし、また織りまぜて起っているものである事を改めて主張しておく。詳細は別報に譲り、簡単に記した次第である。

(東京大学理学部植物学教室)

○高等植物分布資料 (59) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (59)

○アテツマンサク *Hamamelis japonica* Sieb. et Zucc. var. *bitchuensis* Ohwi この変種はいうまでもなく、岡山県阿哲郡新見町をタイプ産地とするもので、従来近畿、中国地方の一部にのみ知られているにすぎなかったが、筆者は 1966 年 8 月 3 日、愛媛県越智郡玉川町鈍川奥で採取し、翌 1967 年の花期 3 月 2 日、ふたたび同地へおもむき花を採取、アテツマンサクであることを確認し、また、その個体数は十数株あることを知った。ここは海拔約 800~900 m、谷へ向う陽光の斜面であった。これによって、この変種の分布が四国にもおよんでいたことがわかった。この標本は林弥栄博士によって同定されたのであつく感謝する。

(今治明德短期大学 山本四郎)